

哲学にとっての母語の問題

—ハイデガーのヘルダリン解釈をめぐる政治哲学的考察

仲正昌樹

ハイデガーのヘルダリン解釈は、中期以降のハイデガー哲学を理解するための重要なカギであると同時に、[哲学—詩（芸術）—政治]の三者関係について一般的に考察するうえでの重要なヒントを提供してくれる。それだけに、ハイデガー哲学の“(非)政治性”をめぐる政治的な対決の焦点にもなりやすい。この報告では、ハイデガーが存在論的に特権的な地位を与えていると思われるヘルダリンの詩作品が、ハイデガーにとっての母語であるドイツ語によって表現されていることに焦点を当てながら、「哲学者にとっての母語」をめぐる問題について考察していく。ヘルダリン解釈に見られる、母語の世界に沈潜するかのような身振りを、最初から危険視するのではなく、そこにどのような理論的あるいはメタ倫理的な問題が含まれているのか、アドルノ、デリダ、スタイナー、ラクー＝ラバルトなどの議論を視野に入れながら、可能な限りニュートラルに分析することを試みたい。

① ハイデガーにとっての[言語—母語—詩的言語]

・ハイデガーの言語観の特徴

非分析的・非記号論的 (cf.カルナップによる批判)

存在論 (『存在と時間』) との繋がり

〈legein〉 (→versammeln) するものとしてのロゴス

「集められて有ること」 (『形而上学入門』 第四八節以下)

↓

「現われ」を可能にする = 「存在」を開示する

・言語—思考—詩作

言語 = 存在が語になること (Wortwerden des Seins)

= 原詩作 (Ur-Dichtung)

(『形而上学入門』 五三節)

言語と詩作の根源的な繋がり

思考 (哲学) に先行する詩作

・民族 (Volk) にとっての「詩作」

ある民族は原詩作において存在を詩作する

詩作は歴史的な民族の原言語 (Ursprache) である

パルメニデス、ヘラクレイトス、ソフォクレス

・(日常的な) 母語の問題 (?)

後にヘーベル論の文脈で 言語—方言—故郷

「人間が何時語ろうと、またいかに語ろうと、彼が語るのは、前もって既に言語に聞き入ることによってです。その際に、言語を聞き逃すことも、一種の聞くことです。人間は、彼の本質が帰属する = 語り向けられている言語から、語っているのです (Der Mensch

spricht aus jener Sprache heraus, der sein Wesen zugesprochen ist)。我々はこの言語を、母語 (Muttersprache) と呼びます。／歴史的に育ってきた言語——そうした言語が母語であるということ——に鑑みて、私たちはこう言っているでしょう。本来、言語が語るのであって、人間ではない。人間は、その都度言語に対応して＝語る (ent-spricht) 限りにおいて、初めて語るのである、と」(『ヘーベル——家の友』(一九五七))

「言語は、しかしながら依然として、諸民族や諸部族が歴運的にその内に生み入れられ、その内で育ち、居住する、その都度の言語である。同様に、故郷なるものもこの地上に存在しない。故郷はその都度のこの大地であり、それ自体として運命である。言語は、その統べること (Walten)、及び本質＝現成 (Wesen) から言えば、その都度、ある故郷の言語、郷土的に目覚め、両親の家という住処 (Zuhause) で語る言語である。言語は母語としての言語である」(『言語と故郷』(一九六〇))

② ハイデガーのヘルダリン解釈と民族の原詩作

- ・ハイデガーのヘルダリンに対する関わり方
 - ヘルダリンの「詩作」したもの的思考する (≠文学作品としての解釈)
 - (単なる内面空間ではない)
 - ヘルダリンの文学史・思想史的位置付けを拒否する身振り
 - ↓
- ・ドイツ民族の詩人としてのヘルダリン
 - 合図 (Wink) を民族に伝える
 - 民族にとっての存在 (永続するもの) を「樹立 stiften」する
 - (人為的構築ではなく、「テクネー」？ (ラクー＝ラバルト))

詩人の詩人：他の詩人の詩作の限界線を確定
(＝詩的表象を可能にするものを樹立する)
「神々」を告知する

ギリシア人にとってのホメロスに相当

「詩作とは、この合図をさらに合図によって民族に伝えることなのである。あるいはこれを民族の側から見れば、詩作とは、民族の現存在をこの合図の領域の中へ置き入れること、すなわち、どのような指示において神々が開示されたものとなるかを、何か意図されたものとか観察しうるものとしてではなく、合図という形で示すこと、指示することである。

(……) 詩作とは永続するものの樹立であり、永続するものを表現するための基礎付けである。詩人とは存在を基礎付ける者 (Gründer des Seins) である。(……) 神々の合図が詩人によって、いわば民族の言葉の土台壁の中に埋め込まれること——恐らく、民族は最初それに気付かないだろうが——によって、民族の歴史的現存在の内に存在が樹立され、この存在の中に指示と指針が入れられ保存されるのである」(『ヘルダリンの賛歌「ゲルマーニエン」と「ライン」』)

- ・ハイデガーのヘルダリン解釈における飛躍（？）（やや挑発的な問題提起）

「政治的」次元の呼び込み（言語に基づく境界線の画定→ポリス的秩序の「創設」）

：（詩人の）詩人による祖国的存在の「樹立」

政治の創作（虚構）と美的創作の等根源性

（Cf. ラクー＝ラバルト『政治的なものの虚構』）



詩（文学）と政治の共通性

創造（創設）的であると同時に、排他（境界線画定）的

母語を基盤にした共同体（感覚）

言語の「取り集め」、「明るみ」にもたらす作用に焦点を当てただけなら、他の詩人でもよくなかったか？

：ソフトランディングの可能性

Cf. トラークル or ヘーベル

日常的に慣れ親しんだもの→詩的形象→抽象概念→世界観→神々→存在（？）

（現象学やガダマー的解釈学、分析哲学などとの接続可能性？）

- ・ヘルダリンの祖国的転回

「固有なもの das Eigene／異質なもの das Fremde」

「天の火」と「叙述の明晰性」（対称的な関係か？）

（ベーレンドルフ宛ての書簡 『「回想」講義』）

固有／異質 ⇔ ドイツ／ギリシアか、近代／古代か

祖国 ⇔ ポリスか、Nation か、故郷か、近代か

（ラクー＝ラバルト 「ミメシス」的構造の不可避性）

→ 〈Waterland〉の意味の固定・実体化（？）

- ・ヘルダリンを通しての「ドイツ語の革新」への期待

「危機」の中での新しい詩的言語による（祖国的）存在樹立

言語が源泉から生じてくる現場への立ち会い（？）

→新たな存在論のための語彙の創出

（ジョージ・スタイナー）

復古的・懐古的なナショナリズム（政治的ロマン主義）との違い

：ヘルダリンの唯一性の強調

（ラクー＝ラバルト、クラーク）

→では、何を基準に「解明」するのか？

③ ハイデガーのヘルダリン解釈の“政治”性をめぐる問題

